はじめに

人間にとって髪とはどのようなものだろうか？　ほとんどの人が生まれたときから願わなくても生えているものだから、特にその存在やありがたみについて考えたりしない。だが、髪は頭皮を保護するもの、おしゃれをするための道具であり、古代から「人間を人間たらしめるもの」（ Geraldine Biddle-Perry 2008 ： 97 ）として、誰にとっても欠かすことのできない身体の部位である。髪の身体のほかの部位と明らかに異なる特徴は、伸びるという点である。 Sarah Cheang （ 2008 ： 27 ）によると、髪の伸びるという性質は、確実にその人間が生きていることを証明する基準であるという。さらに、カットする、ウェーブをかける、染めるなど、自分の希望を表現できる可変的な側面も持つ。むしろ、私たちにとって、この可変的な側面が果たす役割の方が大きいだろう。特別キメてもキメなくても、髪はおしゃれの道具、自己表現のステージなのである。頭皮を保護するという機能的側面などは置いておこう。Biddle-Perry， Cheang （ 2008 ：3-10）によると、髪は社会と文化、性別と人種の統合であり、そこには実用性や社会的外見、精神的内面などの個人的・民族的な自己表現が備わっているという。髪型は歴史の中でいくつも形成されていき、社会的アイデンティティと儀式の維持（髪は人種、家系、部族を示すもの。ある部族においては髪がお守りや魔よけに用いられる）における象徴的価値や、文学メディアの中で果たす髪の役割などが知られている（ Cheang 2008 ： 27 ）。 18 世紀のイギリスでは、髪型は性別や階級を表す明らかなシンボルであり、商業やエンタテイメントの場でも重要な役割を果たしていた。髪の有無は、社会と身体の境界をコントロールするもの、髪型は直感・具象的シンボルであるという記述もある。黒人のカールした毛やアフロヘアは、黒人は美しいという意識、「黒色は美しい」という表明、アフリカン・アメリカンの象徴である。さらに、髪型・染髪の多様性は性別・人種・民族の境界を撤廃する。また、汚れや清潔に関する不安や心配が身体や髪に表れる。ある集団において、犯罪の予防、社会秩序の維持のために、髪を切って回収する運動が行われたりなどもする。髪は、相手への親密性や疎外をも表現する感情的な力も持つ。女性の髪は平凡な女性らしさと非凡な女性らしさ、自然美や虚飾・虚偽などを内包している。ＴＶドラマ「デスパレートな妻たち」に出演している女優たちは、それぞれ異なるヘアスタイル、カラリング、ドレスアップをしている。経済的なものや考え方の違い、女優たちの生産と消費、物語における役の特徴づけなどがその背後に見られる。このように、髪は他者との違いを認識できる証明物、

男と女、見方か敵、善か悪、危険か安全か、相反するものを見分けられる、服装や表情よりもはっきりとした第一印象を目に映すことのできるものである（ Biddle-Perry 2008 ： 97 ）。例えば、髪の色にも注目してみると、黒髪から茶髪などの柔らかな色に変えれば、髪を染めた本人の精神状態も多少は柔和なものに変化してくるだろうし、他者に与えるイメージも以前とは違ったものになってくるのではないだろうか？　さらに彩度の高い金髪などの色に染めると、柔和なイメージを超越し、その髪の色どころかその人の存在に圧倒される。髪の色は、見る人の持つイメージの良し悪しによっても感じ方が異なってくる。

髪を染めることは、単なる流行かもしれない。しかし、その髪の色の持つイメージや、そのイメージが作られていった背景を探していくことによって、人々が髪に託していること、他者に向けてどんなふうに自分を表現したいのかということが見えてくる。これが本稿を書くきっかけである。

本稿では、第 1 章では西洋科学理論と髪について、第 2 章では日本人の染髪について、第 3 章では金髪の持つ気質について、第 4 章ではアニメのキャラクターの髪の色について見ていき、染髪に見られる人種概念について考察していきたい。

第１章　西洋科学理論と髪

人間は 90 %、そのＤＮＡを共有する純血種であり、人種間の身体に関する多様性は、人種の違いよりも広範囲にわたるといわれる。生物分類学的に、ほかのグループとは異なる特性が全体の 75 %見られなければ１つの人種として認められない。しかし、髪が人種の特徴として見なされるのはなぜだろうか？　そこで、西洋科学理論（生物学的相違に基づいて人間をグループ分けしたもの）の歴史（ Cheang 2008 ： 28-33 ）を紹介する。

15 世紀後半、ヨーロッパ人は「ヨーロッパ人ではない」（当時、人種を特定できなかったため、このような表現を使う）人たちと出会う。そこで文化や肌の色などの身体的特徴、言語、習慣などの様々な違いを認識する。さらに、頭髪、顔に生えている毛（産毛やひげ）、体毛の色と質感、整髪、剃髪など、細部にわたる違いも発見した。 18 ～ 19 世紀、比較人間解剖学が、人間を「人種」に分けるために用いられるようになり、言語や身体的特徴は人間の相違を決定するものとされた。しかし、この考え方は、人種的な特徴であるのか、個人的な特徴であるのかを判別できず、混乱を招く結果となった。

その後、西洋科学理論に基づいて、新しい（科学的な）人種に対する考えが生み出される。それは、全生物をピラミッド型に分類し、底辺にはアメーバがいて、最上位には神が君臨する、上に行くにしたがって優れているという考え方に基づいた“ the Great Chain of Being（生物の巨大な連鎖）”の名で知られる、中世の古いシステムにその概念に関する根源がある。そのピラミッドにおける、人間の人種という部分では、全人種において白人種が最高位に置かれている。 18 世紀、人種に関する理論は、白人中心の西洋帝国主義と奴隷制度に従って展開されていった。この人種のヒエラルキーによって、非白人種に対しては白人種の社会経済的支配が存在するという世界観を自然なものとして植えつけさせられた。一方では、気候が人間の進化に影響を与えるという考え、そもそもの始まりは起源の違いにあり、それによって異なる人種が生まれて来るという考えが、人種の相違が存在する原因として討論に持ち出された。生物学的相違が存在する原因は、生物学的人間社会には差異があり、それによって自然配列が行われるという直接的なもの、もしくは環境的要因によって引き起こされる種の進化のような自然淘汰であると考えられる。生物の巨大な連鎖によると、人間は類人猿との密接なつながりがあるらしい。しかし、この類人猿から人間に進化したという発見は、まだ曖昧なものであり、その進化過程には、人間と類人猿以外の種も関わっているのではないかという疑問や、何が類人猿に最も近い種なのか、

何が類人猿から最も遠い種なのかを確かめるため、新たな生態研究がされるべきであるという指摘も残されている。

人種と人間解剖学の研究は、類人猿に対する関心を深めた。 1864 年、医者 Franz Pruner-Bey によって行われた、人間の毛（髪の毛）と人種の特徴の研究は、チンパンジー、ゴリラ、オランウータン、ヒヒなどの動物の頭部に生えた毛に関連した箇所で結論が出された。この毛の研究における人間と類人猿とのつながりは、 20 世紀イギリスの物学者 William Charles Osman Hill の研究にも見ることができる。彼は 800 以上の霊長類の毛（人間のものと人間でないものを含む）のコレクションを所有していた。その中の人間の毛のコレクションで圧倒的に多く集められていたのが、マレー人、タミル人、シンハラ人、ヴェーダ人などの南インドやスリランカの民族のものであった。 Osman Hill は、スリランカにおいて数年かけて、頭髪、眉毛やあごひげ、口ひげなどの顔に生えている毛や、ありとあらゆる体毛を、生きている人間の男女を問わず、死体からも採取した。シンハラ人の 6 ヶ月の胎児からも、頭髪や顔に生えている毛を採取した。

しかし、西洋科学理論に基づいた人種概念は偏見や迫害をもたらした。黒人とユダヤ人は、白色人種と比較しても文化的差異はほとんどないのだが、生まれながらにその性質が劣っていると考えられた。こうした考え方は虐待、絶滅、迫害の恐怖に彼らをさらすこととなった。身体的特徴に基づいて割り当てられた人種というカテゴリーは、白色人種（コーカソイド）は黄色人種（モンゴロイド）より上にいて、黄色人種は黒色人種（ネグロイド）よりも上にいるヒエラルキーを創り上げた。これらのコーカソイド、モンゴロイド、ネグロイドの主な 3 人種は、さらに亜種に分類される。共通の祖先や身体的特徴を持つと考えられるものもある。

19 ～ 20 世紀にかけて、毛（髪の毛）の特徴は、眼や皮膚の色とともに、人種のアイデンティティを示す第一要素として扱われた。人類学者にとって毛（髪の毛）はとても魅力的なものであった。なぜならば、以下の 3 つの要素を含んでいるからだ。第一に、髪は骨格を調査するのとは違い、その人から切り取れば、離れた場所で社会的・物理的介入がほとんどない状態で研究できる。そして、解剖や専門家の指導が必要ない。第二に、髪には直接的な視覚インパクトがあるため、一目見ただけで人種の判別ができるのである。第三に、眼や皮膚の色も一瞬で確認することができるのだが、より精密な分析をしようとすると、現地でカラーチャートを見ながらのきめ細かい比較が必要とされる一方、髪は差し出してくれた人の生死は関係なくその色や肌理が保たれるため、切り取って現地から持ち

帰り、日数が過ぎてしまっても研究できるのである。

19 世紀半ば、 John Crawfurd により、 3 人種の髪の毛について研究が行われた。コーカソイドの髪は、色の種類が豊富であり、髪質が良く、柔らかく、絹のようであり、このような髪を持つ白色人種は、文化的にほかの人種よりも発展していて、優れたアイデンティティを持っている。モンゴロイドの髪は、肌理が粗く、一様に真っ直ぐ伸び、色は黒く、それは黄色人種の単調さを暗に意味していて、生まれながらに物事を革新していく力が欠如している。ネグロイドの髪は、黒く羊毛のようで、このような髪を持つ黒色人種は、白色人種とは完全に隔離された人種である。白色人種は多数の起源を持つが、黒色人種は単一の起源しか持たない。 Crawfurd は以上の結論を出した。このような研究結果が根強く残る中で、 19 世紀イギリスの民俗学者James Cowles Prichardは、同じく人間の髪の毛について研究した結果、黒色人種の髪は羊の毛ではない、それゆえにすべての人種は同一種、同じ起源を持つという結論を出した。

それでも、黒色人種の髪は「羊毛のよう」「人間よりも動物に近い」といわれ、 18 ～ 19 世紀のアメリカにおいて、黒人が真っ直ぐな髪にするということは、白色人種や社会概念の境界に足を踏み入れるものとされた。

20 世紀に入っても、まだ髪の毛はほかの身体的特徴とともに人種の説明をする際に用いられた。 1950 年の南アフリカにおける髪の研究の結果、髪は種族の混合を示し、母方の特徴や父方の特徴が現れるという結論が出された。

19 世紀後半から 20 世紀前半、イギリスの人類学者たちは、髪の色と人種とを結びつけることに限定せず、その調査対象もコーカソイド、モンゴロイド、ネグロイドの 3 人種に限定しないほうがよいと方針を変えた。そこで、髪の毛と精神病、病気への感染のしやすさを論証した。髪の色が暗い人はがんに罹りやすく、赤毛の人は精神異常にはなりにくいという結果が出された。 1911 年、 D. MacDonald はグラスゴー病院で、子供の髪の色と猩紅熱、ジフテリア、麻疹、百日咳との関連性ついて調査した。髪の色が暗い子供、赤毛の子供たちはこれらの病気に最も罹りにくく、中間色の髪の子供は永久的に身体に病気を負い、金髪の子供は病気に感染すると最も死に至りやすいという結果が出された。 MacDonald は、これらの調査結果は、ヨーロッパ人たちに影響を与えるだろうと推測した。

その約 50 年前の 1862 年、イギリスの民俗学者John Beddoeは、髪の毛と眼の色を用いて、ブリティッシュの起源を調査した。アイリッシュやウェルシュはその髪質から、ヒ

トと類人猿の中間、人種的には黒人と同じ階層にあると考えられた。ケルト人がアイルランド、ウェールズ、スコットランドから都市部へ移動したとき、ブリティッシュたちは、これらの暗い色の髪の人々は、都市病に対する抵抗力が強いと考えた。優秀な子孫を残すという考えに基づくと、金髪の女性たちが独身のうちに亡くなる現象が多くなった。結果として、金髪が消滅し、暗い色の髪が生き残るのであった。これがブリティッシュの髪の色が濃くなっていった過程である。これが Beddoe の調査結果である。

髪と人種、髪と病理学を結びつけた研究は、髪に関する広い概念をもたらした。その結果として認識されていることは、基本的に人間という種は自然に異なるグループに分かれていって生存し続けているということである。ただし、髪の色の科学的研究は困難をはらむ点もあった。場所によって微妙に明るくも暗くも見える点や、子供の髪の毛は成長するにつれ、色が変化するという点が研究結果をやや曖昧なものにしてしまった。

以上が、西洋科学理論の歴史、それに基づいた数々の研究・調査結果の紹介である。本当に科学的根拠に基づいているとは言い難く、単なる人種差別的な概念も含まれているため、昔はこれらの理論や研究結果は否定的な見方をされることが多かった。しかし、現代では髪の色に関して、過去ほどに強い否定的な見方はなくなり、肯定的な見方に移行している。人種の上下の良し悪しでもなく、能力の良し悪しでもない。次の章からは、染髪の歴史と西洋科学理論に基づく人種概念との関わり、それが示すアイデンティティを考察していく。

第 2 章　日本人の染髪について

日本ヘアカラー工業会、日本大百科全書による染髪の歴史によれば、染髪の起源は意外に古く、紀元前 3000 年の古代エジプトの頃から、植物や動物、鉱物を使用し、髪を染めていた。植物を使ったものに、ミソハギ科の植物ヘンナの枯れ葉で作られた染め粉や、ベニバナの粉などが見られる。古代における染髪は、美のためだけではなく、宗教、魔よけ、豊作祈願などの魔法行事のためにも行われていた。伝説によると、回教の開祖マホメットは、ヘンナを使って、自分のアゴヒゲを染めていたという。古代中国では、茶の葉の抽出物と鉄を髪につけて黒く染めていた。また、古代ローマの貴婦人たちは、歴史上において最も金髪に憧れ、自分たちの毛髪を金髪にするために多大な努力を重ねていた。明礬、生石灰、天然ソーダ等に古いブドウ酒を加えて水に溶かしたものを“ブロンド天然水”と呼んで愛用し、一晩あるいは数日間も髪につけて放置し、金髪にしていたらしいが、毛髪をひどく痛めたという。そのため、この時点ではかつらが愛用されていた。

中世から近世にかけては、ヘアスタイルや髪の色に変化がもたらされたが、特に新しい染料が使われていたわけではなく、手数をかけつつも、十分な効果が得られなかったらしい。カミツレやクルミなどの抽出液が 19 世紀の中頃まで使われた。

一方、日本における染髪はどうかというと、『源平盛衰記』や『平家物語』の中に、北陸の武将、斎藤実盛が寿永 2 年（ 1183 年）篠原の戦いで、自分を少しでも強く若く見せるため、白髪染めをして出陣したといわれる。『平家物語』巻 7 に、「老武者とて人のあなどらんも口惜しかるべし」という実盛の言葉が残されている。この頃の染髪には、鉱物性の無機顔料などが使われていた。また、 1813 年に白髪を黒くし、光沢を出す薬の伝として、ザクロの皮を煎じて塗る方法、クワの白木根を生油で煮詰めて塗る方法なども紹介されている。

ここからは染毛剤の発展について見ていく。まずは近代の染毛剤について。 19 世紀半ばから、近代科学の発展により、新しい化合物が合成され、それまで主体であった天然資源から合成品への移行が始まる。今日の近代的毛染めの主原料である有機合成染料が始めて使われたのは、 1845 年のピロガロールであり、 1856 年には、イギリスの W. パーキンはモーブの合成に成功し、それからは、ほとんどの天然染料が合成できるようになった。なお、過酸化水素は、 1818 年、フランスのテナールによって発見された。現在、世界的に使用されているパラフェニレンジアミンは、 1863 年、ドイツの A.W. ホフマンによっ

て発見され、 1883 年、フランスのP.モネーが過酸化水素との結合による染色特許を取得した。その 5 年後の 1888 年には、E.エルドマンがジアミン、アミノフェノール類及び関連化合物による毛皮や頭髪の染色特許を取得し、商品化していった。

つづいて近代日本の染毛剤について。日本初の酸化染料による染毛剤が発売されたのは、明治 38 年（ 1905 年）であった。この時代の商品名は、「元禄」や「君が代」など。パラフェニレンジアミンのアルカリ溶液を頭髪に塗り、空気による酸化によって、 2 時間ほどかけて髪を染めていた。それ以前は、タンニン酸と鉄分を用いて、いわゆる「おはぐろ」を利用し、 10 時間もかけて染めていたので、飛躍的な時間の短縮であった。なお、明治時代に発売された染毛剤は、すべて黒色だったので、当時の商品には、「白毛赤毛を黒く自然の髪に染め上げる」といった説明が付いていた。当時、地毛が明るいのは、癖毛と同様に女性の悩みであった。その後、大正元年（ 1912 年）には、パラフェニレンジアミンを過酸化水素で酸化することが提案され、現在の酸化染毛剤の原型ができる。大正 7 年（ 1918 年）には、パラフェニレンジアミン粉末一包、のり粉一包、及び過酸化水素水一壜 3 剤タイプの白髪染めが発売され、染髪時間は 30 分になった。第 2 次世界大戦までは、新劇の俳優がかつらのかわりに一時的に髪を染める程度だったので、庶民にはあまり定着していなかったようである。

最後に、戦後から現在までの染毛剤について。第 2 次世界大戦を経て昭和 30 年の初頭には、日本独特の製剤形態である粉末一剤タイプの染毛剤が発売された。これは粉末状の酸化染料、糊料、及び酸化剤を一壜中に入れたものであり、昭和 40 年代に登場するシャンプー式ヘアカラーと並んで、家庭用染毛剤の代表格であった。染髪が庶民の間でも流行し始めたのは、やはり、戦後、欧米人のいろいろな頭髪の色を直接目にした影響による。また、昭和 40 年代には、服装や生活環境がカラフル、ファッショナブルとなり、白髪染めばかりでなく、若い女性をもターゲットとした黒髪を明るく染める“おしゃれ染め”が登場する。しかし、新しく生えてくる毛の手入れが大変であるとか、髪が痛むとかの理由により、再び染毛剤は、白髪染め中心に戻ってしまった。昭和 50 年代後半になると、染め上がりの髪のツヤや手触りが良い、染めるときのアンモニア臭が少ない、垂れ落ちが少ない、必要な量だけ取り出せ、染めたい部分だけ塗布できるなどの理由から、 1 剤染料部分と 2 剤染料部分のそれぞれをチューブに詰めたクリームタイプの染毛剤が登場し、それからの酸化染髪剤は、徐々にクリームタイプが増えていった。また、昭和 60 年代に入ると、若い女性の間でロングストレートヘアが流行し、透明感があり、髪をさらさらとした

感触に仕上げる酸性染毛料（ヘアマニキュア）が美容室を中心に人気を博した。

そして現在では、服を着替え、靴を選ぶように、白髪染め、おしゃれ染めが当たり前のようにされる時代になった。 20 代女性の 6 割以上が染髪し、髪を染めたいという意識まで含めれば 7 割以上の需要があるという。また、団塊の世代がどんどん白髪になっていき、高齢人口も膨らむ中で、白髪染めの需要も増加し、各メーカーも使いやすさや毛髪への負担を考慮した様々な形態、コンセプトの商品を開発し、市場をにぎわせている。

以上が染髪の起源と日本における染髪の歴史である。ここからは、近年の日本人の染髪に焦点を当てていく。染毛剤が改良されて、大半の人が簡単に染髪できるようになってからは、本当にどこを見渡しても、生来の黒髪を茶髪や金髪、またはその他の奇抜な色など、自分の思い通りの色に変えている人ばかりである。ここ数年、黒髪がまた流行りつつあるようだが、それにしても、特に茶系統の色への染髪が若者の間では依然、ポピュラーである。肌が白く透き通っているわけでもなく、鼻も高いわけでもなく、100％西洋人になれないと分かりつつも、日本人の中において西洋的な存在に近づいたことに優越感を感じてしまっているのだろうか？　どうして日本人でありながらも日本人であることから逃れようとするのだろうか？　そこには、人種のパフォーマティヴィティ、他人種への異化、過去に作り出された人種概念への肯定が存在しているはずである。それぞれの髪の色に性格があるのかもしれない。第 3 章、第 4 章では、人種概念が染髪のどのようなところに引き継がれているのかを見ていきたい。

第３章　金髪の持つ気質

映画『キューティ･ブロンド』の主人公エル・ウッズは、映画の題名にもあるようにブロンド（金髪）の大学生で成績優秀、社交クラブの会長も務めていて、政治家をめざす恋人ワーナーがいるなど毎日が充実していたのだが、彼女は金髪というだけで、突然ワーナーに捨てられてしまう。ワーナーの台詞に「議員の妻にふさわしいのはジャッキー（ジャクリーン・ケネディ）でマリリン・モンローじゃない」というのがある。ジャッキーとはブルネット（黒みがかった髪、茶色の髪）の女性のことで、マリリン・モンローとは周知のように金髪の女性のことである。アメリカでブロンドの女性にまとわりつくイメージといえば、映画でマリリン・モンローが演じた「金持ちの男との結婚を夢見る、容姿だけに自信のある頭が悪い女」というものだ。もちろんエルにも日々このイメージがまとわりついていたのだ。一方で、ジャクリーン・ケネディのようなブルネットには、インテリのお嬢様のようなイメージがあり、ワーナーをめぐるエルの宿敵ヴィヴィアンはブルネットである。この髪の色に対するイメージは現在に至るまで続いていて、金髪というだけで差別を受けるため、天然のブロンドの女性は、わざわざブルネットに染めることもある。アメリカではこのブルネットは無難な色として重宝がられるのだ。

このような偏見はアメリカだけでなく、ヨーロッパにおいてもされることである。むしろ、この金髪蔑視の風潮は古くはヨーロッパから始まったと言っても過言ではない。そもそも、このような風潮はマリリン・モンローがスクリーンに登場し、その容姿とブロンドの髪で世界中に鮮烈な印象を焼きつけたよりもずっと前のこと、帝政ローマの時代からすでにあった。差別の対象となったのはマリリン・モンローのような金髪の女性に限られたものではなく、金髪の人が多い人種全般にわたったものであった。夏森（ 1994 ： 12-13 ）によると、日本人にはよく知られていないことだが、ヨーロッパでは金髪を尊重する風潮以前に、一段低くみる傾向があったという。帝政時代のローマのある資料には、そのような傾向は蛮人に金髪が多かったことに由来したと書かれている。当時のローマ人が指す「蛮人」とはローマ人、ギリシャ人、ユダヤ人以外の外国人や、奴隷に多かったゲルマン人などのことであった。「金髪の、見るからに蛮人である者が……」といった表現で、ブロンドに対する低い評価を記していた。実際、現在のヨーロッパにも「ダム・ブロンド（口の不自由な人の金髪）」という表現が存在し、“金髪は無能者の証”と解釈されることもある。

ただ１つ、注意しておかなければならないことがある。近代における金髪の女性に対する偏見にせよ、古代におけるローマ人から見たゲルマン人に対する偏見にせよ、何の科学的実証に基づいてされたものではない。夏森（ 1994 ： 13 ）も金髪蔑視については、ナチス・ドイツのヒトラーによる「金髪最優秀民族説」と同様に、なんの根拠もないと言っている。

これまで金髪を品のないものだと言っておきながらも、同じヨーロッパやアメリカにおいて、逆の偏った見方もある。美人やハンサムの条件に、“金髪で青い眼”が第一に挙げられるのだ。金髪でさえあれば、少々の欠点があっても許されることもあるという（夏森 1994 ： 13 ）。

ここからは、Pamela Church Gibson （ 2008 ： 141-148）による、最近の金髪に関する記述を見ていく。近年の異常なまでのセレブ志向により、肩まで伸びた金髪の痩身の白人女性がよくファッション誌の表紙を飾っている。しかし、これは驚くようなことではなく、 Marina Warner はすでに“*From the Beast to the bronde*”（ 1994 ）の中で、「金髪＝美」であることを西洋の神話やおとぎ話の中に見出していた（ 2008 ： 141 ）。 Paula Yates は“ *Blonde : A History from Their Earliest Roots*”（ 1983 ）に、歴史や神話上の金髪の人物について記していた。旧約聖書の創世記に登場する、かの有名なイヴも金髪の女性であった。このイヴをはじめとする金髪の人物は、美しさ、身の安全、豊かな生活、他者からの賞賛、概念化された力など特別な権利を天地が創造された頃より所有していた。紀元前 3066 年のエジプトでのこと、自身も金髪の美女として知られる女王ニトクリスは、彼女の召使いたちに金髪のかつらを被せていた。古代ローマの時代では、身を売る女性たちは金髪のかつらを被ることが法律上の義務であった。さらに、堕落と邪悪で知られるローマ帝国第三代皇帝カリギュラはひげを金色に染め、悪女で知られるメッサリナ（ローマ帝国第四代皇帝クラウディウスの妃）は密会に向けて金髪のかつらを被っていた（ 2008 ： 142）。彼らのように、金髪の人物は古代から奔放であり、特別視されていた。

生来金髪ではない白人も、あとから金髪にすることがある。以下は、それによって脚光を浴びた人たちである。 Richard Dyer の著書“*White*”（ 1997 ）によると、映画界における金髪で最も有名な 3 人の女優、ジーン・ハーロウ、マリリン・モンロー、ブリジット・バルドーは皆、暗めの髪の色で生まれてきたのだが、その髪を金色に変えてからは、スクリーンのスターの座にのし上がった。 1992 年、映画評論家の Ginette Vincendeau

によると、ブリジット・バルドーは金髪にするまで、少なくても 20 本以上の映画に出演していたのだが、どれも記憶に残るような女優ではなかったという。ところが、金髪で出演した“*Et Dieu Crea La Femme*”（ 1956 ）からは彼女のキャリアと競争心の強い姿勢が作られていった（ 2008 ： 143-144）。 1978 年、ロックミュージシャンのロッド・スチュワートは髪を金色に染め、アルバム“*Blondes Have More Fun*”（スーパースターはブロンドがお好き）を発表した。それは、金髪は女性的なものという固定的なジェンダー概念に対する挑戦的な売り出しであった（ 2008 ： 143）。スチュワートの金髪には批評が多かったが、特に近年の男性の金髪は世界的なサッカー選手に見られる。これはおそらく、ワールドカップ 1998 に始まる。人々の関心は、イングランドのスーパープレーヤー、デイヴィッド・ベッカムの出現に向けられていた。彼は元々茶色い髪だったのだが、この大会が彼のブロンド人生のスタートであった。その後もベッカムは、自身のライフスタイルやファッションセンスも伴って、ピッチの中でも外でも男性の金髪を魅力的なものにした（ 2008 ： 143）。

1990 年代半ばに入ると、アメリカの黒人やアジア人の若者が続々とその黒い髪を金髪に染め出した。アングロアメリカンの若者たちもそれに対抗して金髪に染め出した。白人の人種的特徴をパロディ化したのだろうか？　しかもアングロアメリカンの若者までもがするとは、なんともおかしな話である。アフリカンアメリカンのヘアスタイルで数々の映画に出演することで有名な俳優のサミュエル・L・ジャクソンも、新たな試みとして、映画“*Jumper*”（ 2008 ）に鮮やかな黄色の短く刈り込んだ髪で出演した（ 2008 ： 145）。このアメリカの黒人やアジア人の若者の金髪に匹敵する流行が日本にもある。それがおそらくガングロである。このサブカルチャー的存在であるガングロの女子高生たちは、黒人やアジア人の若者の金髪、すなわちエスニシティの転覆と明らかに関連しているのである。アメリカでは、ガングロという言葉は文字どおり‘black-face’（黒人に扮装した役者）と訳される。皮膚や髪の色と人種的アイデンティティが簡単に同一視される見方はもう覆されてはいるが、日本の女子高生のガングロというパロディは、 19 世紀後半のアングロアメリカンのショーでの白人エンタテイナーによる黒人の扮装との関連性も見られる（ 2008 ： 145）。

誤った主観性の入った髪に関する研究は、黒人やアジア人が白人のような髪の色や髪型にする習慣を、自分たちには権力のないことを暗示する人種的自己嫌悪の症状であると簡単に解釈してしまったが、彼らが金髪にすることは、自己表現と白人が支配的な社会にお

いて生き残るための戦略、そして自らの人種のアイデンティティから離れていく行動として見ることができる。しかし、それは単に白人の真似をするよりも憤りを感じる行為であると考える学者もいる。 Kobena Mercer はこう主張する。ヘアスタイルは日常における美的な習慣として価値が見出されるが、すべての黒人のヘアスタイルは政治的なものから作り出された。彼らのヘアスタイルの一つ一つは、歴史を通しての社会的・象徴的意味を含んだ民族の重要要素を提示する完全装備なのであると（ 2008 ： 144）。

しかし、その勢いは止まらず、黒人の金髪スタイルは西洋文化の現象として、特にイギリスのサッカー界に圧倒的に多く見ることができる。アフリカ人選手はイギリスのサッカーチームに続々と加入している。リヴァプールが 2004 年のヨーロピアンカップで優勝したとき、選手たちのヘアスタイルは目を引くものであった。ジブリル・シセ選手は白い刈った頭で、ポルトガル出身の黒人で元リヴァプールのアベル・ザヴィエル選手は、プラチナブロンドの髪を逆立てた見事に風変わりな髪型だった。現在は、あごひげも同じプラチナブロンドにしている（ 2008 ： 145-146）。*“Footballer’s Haircuts”*（ Cris 2003 ）という著書によると、ピッチの中での多くのヘアスタイルは恐ろしさが強調されているという。 2008 年のアフリカネイションズカップでは、選手たちのユニフォームの奇抜な色は、選手たちの豊富なバリエーションの髪型にぴったり合ったものであった。イングリッシュプレミアシップでは、髪を染めたり、ガーナ代表のジュニオール・アゴゴ選手のように、髪を剃り、きれいな刺青を入れる選手もいた。ギニア代表のマツエカ選手、カメルーンのビニャ選手は鮮やかなアンズ色のカールだった（ 2008 ： 146）。こうして、黒人選手たちはプレーは勿論のこと、染髪や髪型によっても、白人が未だ支配層にいるサッカー界で生き残るために強烈な自己アピールをしているのである。

逆に、白人が黒人のヘアスタイルを取り入れる例もある。ベッカムのピッチの中や外における象徴的なヘアスタイルは、そのときの雰囲気や試合にあわせて変えられたり、彼の世界的なアイデンティティやふれあう民族の多様性に影響されているようである。ベッカムの髪型の中で革新的なものの一つが、アフリカ起源の ‘ cornrows’ （コーンロウ）という髪を何本も編みこんだヘアスタイルである。ベッカムのコーンロウは、金髪の白人が黒人のヘアスタイルをした斬新なものである。このストリートにおいてもピッチにおいても目新しく洗練された彼の動きや外見は、今までになかった民族性の集合を表現している。黒人のヘアスタイリングにおいて、コーンロウのように髪を編みこむ方法は重要な役割を果たしてきた。今日ではその編みこみも、青、赤、紫などにカラリングされたり、つ

け毛を使ってもっと長くされたりしている。イギリスに暮らすアフロカリビアンの女の子たちがよくそのようなアレンジをしている。また、トンガ出身でイングランドのナショナルチームに所属しているラグビー選手のレスリー・ヴァイニコロもカラフルなコーンロウで試合に出場し、アーセナル所属のサッカー選手のバカリ・サニャも、ナイロンでできたカラーの糸を使ったきらびやかな短めのコーンロウでピッチに立っている。黒人のヘアスタイルの習慣とナイロンなどの人工的なものを使った現代的なアレンジとの混合は、社会文化の影響そのものである（ 2008 ： 147）。

選手たちの外見という点において、サッカーの競技場では、民族文化の地位へと到達する知的な上昇を見せている。そして彼らの外見は、 20 世紀の前衛芸術の自由奔放な表現を引き継ぎ、Bakhtinのカーニバル論（特定社会の祭典とは別の、アイデンティティが浮遊した秩序の一時的崩壊を表す）に由来する、にぎやかさと違反や犯罪のような相反する価値を持ち合わせている（ 2008 ： 147-148）と Gibson は言う。

現代では、どんな人種の人も他人種の特徴を髪の色やヘアスタイルに取り入れられるどころか、もはや宴会における余興のように、ほとんど人種概念をパロディ化しているとも言える。

第４章　アニメのキャラクターの髪の色と人種概念

人種概念が引き継がれているものと想定し、アニメのキャラクターにも焦点を当てた。登場人物の髪の色が多彩なことから少女漫画に的を絞り、２つのアニメのキャラクターの髪の色とその性格について調査した。

『美少女戦士セーラームーン』（原作 武内直子）の主人公月野うさぎ（セーラームーン）は金髪である。明るい少女であり、ドジで泣き虫でお調子者である。普段は十番高校に通う。遅刻と朝寝坊は日常茶飯事で、学校の成績はかなり悪い。弟の進吾からは、いつも舐められている。しかし、心根が優しく、周囲の外聞などで先入観を持たず、誰とでも心を許してしまう寛容な心を持っているので友達も多い。単に優しいだけではなく物怖じしないところもある。水野亜美（セーラーマーキュリー）は青い髪である。ＩＱ300の頭脳を持ち、全国模試で常に順位一桁級の優等生のため敬遠されており、うさぎたち以外の友達は少ない。母親は医者。常に本を持っている。たまに眼鏡をかける。このアニメの登場人物の中では（セーラーチームでは）ほぼ唯一の常識人である。心やさしい天才少女ということもあってか、一部のファンには絶大な人気を誇った。火野レイ（セーラーマーズ）は黒髪ストレートのロングヘアである。家が神社のため、家にいる時は巫女装束を身につけている。うさぎとの口論がお約束で、単独行動でもお馬鹿キャラ。お調子者。男性に対して積極的な姿勢が顕著に見られる。アニヲタ（アニメおたくのこと）である。成績は良くない。情熱的な性格で、友達に対しては歯に衣着せぬ発言が多いが、意地悪な性格ではない。悪いところを指摘してあげるほどの友達思いの性格なのである。木野まこと（セーラージュピター）は茶色いくせっ毛（天然パーマ）をポニーテールにまとめている。身体が大きくて喧嘩も強く、また男言葉のために怖い人に思われがちだが、実際は心優しく、女性的すぎる位の少女。しかもかなり惚れっぽい性格の持ち主。その惚れっぽさは失恋した先輩に部分的に似ているというだけでも周りが見えなくなってしまうほど。料理・手芸・園芸などに秀でる。成績はうさぎと同様に良くない。転校する前の学校の制服を着ている。耳にバラのピアスをつけている（変身後もそれは変わらない）。愛野美奈子（セ

ーラーヴィーナス）はうさぎより明るい金髪ロングに赤い大きなリボンが特徴。『セーラームーン』の前作『コードネームはセーラーＶ』（テレビ放映はされていない）では主人公としてうさぎよりも早く登場していたため、セーラー戦士としての戦闘歴は一番長い。外見がうさぎに似ていることから、セーラームーンの影武者として登場することもある。成績はうさぎ並みに良くないが、運動神経は抜群で体育だけは好成績（バレーボール部に所属）。アイドルを目指す陽気な爆走少女。「明るいおバカ」キャラ。天王はるか（セーラーウラヌス）は白い髪である。陸上選手でありレーサーでもある。黄色のスポーツカーが愛車。過去に無限学園に通っていた。無限学園崩壊後はレーサーの仕事に専念していた。その後、うさぎたちと同じ十番高校に編入した。原作ではウラヌスに変身したときは女性、普段は男性の姿を持つ両性具有とされている。アニメでは「男装の麗人」という設定である。男装の麗人ということもあり、女性ファンが多かった。海王みちる（セーラーネプチューン）は明るい緑色の髪である。優雅な少女。バイオリニストでお嬢様言葉を使う。天王はるかと共に無限学園へ通っていた。無限学園崩壊後はバイオリニストの仕事に専念していた。その後、はるかと共に、うさぎたちと同じ十番高校に編入する。冥王せつな（セーラープルート）は濃い緑色の髪である。制服を着ていないため、普段は大学生と思われる。時空の扉の番人として過去の時代から生き続けている。クイーン・セレニティ（うさぎの前世）から禁忌を承っている。１、時間を移動するべからず　２、守るべき扉から決して離れるべからず　３、時間を止めるべからず　という３つの禁忌を守っている。特に時間を止めるべからずは時空の扉の番人として最大の禁忌である。土萠ほたる（セーラーサターン）は黒い髪である。病弱だが、優しくて静かでミステリアスである。ちびうさはピンク色の髪である。ネオ・クイーン・セレニティ（うさぎの来世）とキング・エンディミオン（衛の来世）の娘。現世においては、来世で自分の父親となる衛のことが好きなようである。自己主張が強い。性格もきつく、わがままである。 地場衛（ちばまもる）は黒髪の男性である。設定は大学生で愛車はアルファロメオＳ・Ｚ。普段の性格はきつく、悪い人に見られるが、タキシード仮面に変身し、セーラー戦士たちを助けにやって来る。最初の頃はうさぎと対立していたが、タキシード仮面と衛が同一人物であることや前世での２人の仲が判明してから恋人同士となる。

『 yes! プリキュア５』の主人公夢原のぞみ（キュアドリーム）は濃いピンク色の髪をしている。サンクルミエール学園に通っている中学２年生。喜怒哀楽が豊かで、元気で明るい女の子。成績や運動は今一つよくないが、好奇心は旺盛で失敗しても常に前向きであ

る。夏木りん（キュアルージュ）は茶髪である。のぞみと同じ中学2年生。ボーイッシュでスポーツ万能。男まさりな性格だが、乙女チックな一面も見せる。水無月かれん（キュアアクア）は青い髪をしている。サンクルミエール学園生徒会長の中学3年生。容姿端麗、頭脳明晰で下級生の憧れの的である。感情を表に出さず、弱みを人に見せることがない。秋元こまち（キュアミント）は緑色の髪をしている。かれんと同じ中学3年生。のんびり口調でいつも笑顔のおっとりした性格。だが、怒らせると一番怖い。本が好きで、伝説や物語などに詳しい。春日野うらら（キュアレモネード）は金髪である。彼女は中学1年生。学校に通いながら芸能活動をし、新人アイドルとしても活動している。見た目は幼いが、社会に出ているため考え方は大人っぽく、つらい中でも営業スマイルができる。

調査したアニメのキャラクターはすべて日本人であるが、皆、架空の世界で生きる人間であるため、人物の外見や性格の設定は自由な発想によるものであろう。そのため、登場人物は現実味を帯びた全くの日本人という感じはしない。よって、アニメのキャラクターの髪の色にも人種概念やそれぞれの髪の色の持つイメージが関わっている可能性はあると言える。

髪の色とキャラクターの分析を以下に記す。ピンク、青、緑などのにぎやかな髪の色を持つキャラクターは、現実界で生活する人間がめったに染めることのない髪の色であるために、アニメが夢であふれる世界であることを明示してくれる存在である。子供たちがそのような色を幼少期に好む傾向が多いのも、アニメの影響が少なからずあるだろう。ところが、にぎやかな色に微妙な濃淡をつけた髪の色のキャラクターは、優雅で秘密めいていたり、物静かであったり、単純に理解することのできない影のある性格を持つ。髪の色にも趣の深さが表れているといえる。金髪のキャラクターが主人公もしくは派手なことを好む役柄になるのは、西洋のみならず世界的に金髪碧眼が美の極みと称される事実や古代から金髪の人物が奔放で特別な能力を持つという伝説に影響を受けたことが確かであろう。しかし、どこか不注意なところがあるのも、映画『キューティ・ブロンド』の箇所で紹介した金髪に持たれるマイナスのイメージまでもが描写されているように思われる。茶髪のキャラクターは、金髪のキャラクターほどに特別視されることは少ない。このことから、茶色が西洋でも一般的な髪の色であり、金髪のような派手さが抑えられた、日本人にも定着した色であることがうかがえる。白い髪のキャラクターは独特な存在感を醸し出す。白いライオン、白い蛇のような遺伝子学的に劣性（劣っている意味ではなく、遺伝されにくい性質という意味）である形質を持っていることにその理由が考えられる。その希少性が

アニメを見ている人の心を不思議な世界へ連れて行くのである。黒髪のキャラクターは黒という最も濃い色が示す気の強さや神秘性がその性格に表れている。また、それがおとなしいキャラクターとなると、日本人の控えめであまり物事を騒ぎ立てることのないイメージを象徴しているようにも捉えられる。

おわりに

現代社会では、西洋科学理論によって生み出された人種概念が崩され、自己の人種のアイデンティティに他人種のアイデンティティを織りまぜた新しいアイデンティティが形成されていることが見受けられる。白人だから白人の姿をしなくても、黒人だから黒人の姿をしなくても構わない。そんな固定概念に捕われることのない、本質的アイデンティティを破壊した染髪は、流転する芸術か？パロディか？　まさに人によって表現技法が異なるスペクタクルとも思わせる。

生来黒髪を有する日本人が髪の色を変えようとする第一の理由は、戦後から現在に至るまで続く欧米人への憧れであろう。第二の理由は、芸能人の影響や自身のイメージ作りが適当だろう。さらに日本人は、アニメ・映画などの身近なメディアを通じて、髪の色に投影された人種概念やあるイメージを無意識のうちに記憶しているのではないかと思う。

染髪の歴史に戻るが、第 2 次世界大戦までは新劇の俳優が舞台に上がるためにだけ染髪していた。染毛剤が改良され、庶民が手軽に染髪できるようになる昭和 60 年代までは、染髪は芸能界と一般の世界を区別するための装置であったのかもしれない。一般人は黒髪が主流であった時代にそういった芸能関係者を目にすれば、ただ髪の色が違うだけで庶民とは異質で何か不思議な感覚すら味わったことであろう。反対に、芸能人さながらのファッションや髪型を容易に享受できる現代では、一般人と芸能人の区別がつかないこともよくある。かつては庶民の幻想に終わった欧米人や芸能人の姿、自分のあらまほしき姿が実現されてしまう虚構と現実とが交錯しているのがまさに現在の日本の姿なのだろう。

表現の自由が保障されている現代であるが、髪の色について見直したいことがある。日本人で金髪にする人は、ヨーロッパやアメリカでの良い方のイメージに溺れているのではないだろうか？　逆に金髪が差別の対象になるほどまでに悪いイメージを持たれていることをあまり知らないで、西洋人か異星人になったつもりで自分の金髪に酔い痴れ、自分はほかの人とは世界が違うと思っているかもしれない。他者との差異を見せつけたはいいが、それはあまりにも不均衡なアイデンティティである。現代のファッション業界の発信する

流行は、その消費者は日本人であるというのに、そのほとんどが西洋的であればあるほど好ましいといった売りである。西洋化することだけで世界に通用したような錯覚に陥っては困る。いい意味で世界からの見え方を研究したファッション、髪型、化粧法を開発すべきである。

その一方で、近年、黒髪の美しさや成分の強さを見直す動きが美容業界に広まり、黒髪の女優を何人も出演させて日本女性の素晴らしさをお茶の間に届けているコマーシャルもよく見かける。ここは日本だというのに黒髪を再認識するとは、これもまた、アングロアメリカンの若者たちが金髪にするくらい滑稽な話である。しかし、今まで散々西洋かぶれしてきたから、黒髪についてよく研究されなかったのは無理のない話である。だけども、多くの人が髪を茶色や金色に染める時代だからこそ、きれいに手入れされた黒髪はめずらしさの対象となったり、日本人もしくは東洋人の特質を大切にしていると思われたりする。ただし、黒髪の女性はただ単に黒髪でいるのか、宣伝に影響され、にわかなナショナリズムで黒髪にしているのか、詳しくわからない部分もあるのだが……　茶色などに染めることが当たり前になってしまった今となっては、黒髪は日本人が古来より持つ特質というより、数ある髪の色の一つとして認識されてしまっているような気もする。近年のように美容業界が発信しなければ、生来の髪の色に気づかなくなってしまったのだろうか？　大げさかもしれないが、これが虚構を追い求めた日本の有様だと思う。日本人の染髪自体、アニメのキャラクターと化するに等しい現象なのかもしれない。

黒人のサッカー選手を例に、黒人やアジア人が金髪や鮮やかな髪の色にする風潮は、偏見も抑圧されたものもないファッションの世界的な自由化を感じる。過去と比較すれば、確かに髪の色によって人種の能力や知性が決定される単純な人種概念の枠や、金髪が白人にだけ限定された特徴であるという考え、黒人やアジア人が自分たちの人種的特徴に固執する固定観念からも抜け出している。さらに、人種という集団から、個性あふれる個人の尊重がなされている現代らしさも感じる。しかし、この近代的なあたかも国境のない自己表現に完全な開放感はあるのだろうか？　やはり、どんなに白人の人種的特徴を取り入れて同化しようとしても、黒人・アジア人から感じ取れるのは、「対白人」という反抗的概念からなかなか離れられないでいる実態である。第 3 章で記述したように、黒人・アジア人の金髪は、自己表現と白人が支配的な社会において生き残るための戦略である。それは自身の人種のアイデンティティから離れていく行為だと指摘する学者もいる。かつてアフリカンアメリカンの黒人たちは 1960 年代の公民権運動の際、黒髪の自然な縮れた髪で自

分たちの権力を主張した。同時に彼らは黒人の美しさも主張していた。黒人の黒い肌、縮れた髪が美しいという意識は、白人の透き通った白い肌、真っ直ぐ伸びた髪に対抗するものであった。それは、恥じらいから自尊心へ、劣等から権威へと変えていく動きでもあった。黒人の文化や歴史への関心の上昇し、 1970 年代終盤には、黒人の若者の間でも自然なカールを生かしたアフロヘアやドレッドヘアなどが流行した。アフロヘアは一時的な流行ではなく、もっと幅広い世代に広められるべきだとされた（ Carol Tulloch 2008 ： 123-128）。ところが、現在ではこのような動きや考えが一転してしまっているが、ファッションの発展性の側から見れば、白人への同化と転じた反抗的概念がよき刺激となったおかげで、芸術的かつ個性的な髪の色や髪型が次々と生み出されることとなった。

様々な人種の染髪や金髪の特質により、ヘアスタイルも含めて染髪は確実に自分ではない何者かに異化するため、そして何かを訴えるための道具であることが実証された。染髪に限らず、服装、髪型、化粧、身に着けているものすべてが、すでに自分の精神状態や願望の具現化である。そこには、他者に変身することによって自分の精神的な居場所を確保できるという人間の性質が隠れているのである。ひたすら自分だけを見つめ、自分は何者かと探し続けるよりも、大勢の中で自己と他者との差を発見し、そこで浮き彫りされたもの、自分に足りないものを自分のアイデンティティとして身につけた方が人間にとっては容易なことなのである。はじめから自己が確立されている人間はめったにいないはずである。誰しも自分自身、他人との衝突を繰り返しながら、自己を客観視するようになる。そして一人一人が自分に台本を与え、設定された役を演じる。こうして人間は日々生きているのである。すべての人間は「〇〇的自己」に過ぎないのかもしれない。私たちはそんな虚構の中で生きている。しかし、個々に最初から規定されている人種や性別などの否定と、染髪などによって自分の姿を変える自己の否定の二重否定が人間の中に存在しているのである。

引用文献

夏森恩（ 1994 ）『カミが見ていた世界の歴史　魔女の黒髪 天使の金髪』講談社 pp.12-13

Geraidine Biddle-Perry and Sarah Cheang （ 2008 ）『 Hair 』 Bergpublishers

1 ． Introduction ： Thiking about Hair （ Geraldine Biddle-Perry and Sarah Cheang， pp.1-12 ）

3． Roots ： Hair and Race （Sarah Cheang， pp.27-42）

8． Hair ， Gender and Looking （Geraidine Biddle-Perry， pp.97 ）

10 ． Resounding Power of the Afro Comb （ Carol Tulloch ， pp.123-128 ）

11 ． Concerning Blondeness ： Gender ， Ethnicity ， Spectacle and Footballers'Waves （Pamela Church Gibson， pp.141-148 ）

参考にした映画、ＴＶアニメ、公式サイト

日本ヘアカラー工業会　公式サイト http://www.jhcia.org/

ジャパンナレッジ　http://www.jkn21.com/

映画『キューティ･ブロンド』（ 2001 、ロバート・ルケティック監督）

公式サイト http://movies.foxjapan.com/cutieblonde/

ＴＶアニメ『美少女戦士セーラームーン』（原作 武内直子、放映 テレビ朝日系・東映動画（現・東映アニメーション）制作）

公式サイト『セーラームーンチャンネル』 http://sailormoon.channel.or.jp/

ＴＶアニメ『 yes! プリキュア５』（放映 テレビ朝日系・ＡＢＣ制作）

公式サイト http://www.toei-anim.co.jp/tv/yes_precure5